

一八八四年十月二日(木)

聖ラーマクリシユナ、トツキネーシヨル南神寺トツキネーシヨルにおいて、ラトウ、校長、マニラル、ムクジエー等信者たちと共に

ブラフマ協会員であるマニラルに対する教訓——独善主義(Dogmatism)を捨てよ

タクール、聖ラーマクリシユナは、トツキネーシヨル南神寺に信者たちに囲まれて坐っておられる。

今日は木曜日、キリスト暦一八八四年十月二日。ベンガル暦一二九一年アツシン月十七日。アツシン白分十二—十三日目。大聖ヴィジャヤ・ダシャミー(訳註)(ドウルガー祭)から二日たった。昨日、タクールはカルカッタのアダルの家を訪問された。そこには、ナラン、バブラーム、校長、ケダル、ヴィジャイ等、大勢が来ていた。タクールはそこで皆といっしょに楽しくキールタンを歌い、かつ踊られた。

近頃は、タクールのところに、ラトウ、ラームラル、ハリシユの三人が住んでいる。バブラームも時々来て泊まつていく。ラームラルさんは大実母、バヴァタリニ救いの女神バヴァタリニの司祭をしているのである。ハズラーもいる。(訳註——カーリー女神はその働きによって様々な別名を持つが、トツキネーシヨル南神寺のカーリー女神は、バヴァタリニトツキネーシヨル救いの女神と呼ばれている)

今日は、マニラル・マリツク、プリヤ・ムクジェー、彼の親類のハリ、シヴァプールに住んでいるヒゲをはやしたブラフマ協会員、ブラバザールにあるマリツク通り十二番地からのマルワリの信者たちが来ている。やがて、ドワキネンシヨル南神村の青年が数人と、シンティのマヘンドラカウイインジ医師が来た。マニラルは古くからのブラフマ協会員である。(訳註、カヴィラーージ——インドの伝統的な自然療法アーユルヴェーダの医者)

聖ラーマクリシュナ「(マニラルたちに向かつて)——心でノモシカルをすればいいんだよ。足にさわってあいさつする必要なんかないさ。心でノモシカルすれば、誰をも困らせはしない。(訳註、ノモシカル——合掌してあいさつすること、ヒンディー語ではナマスカール)

自分の宗旨だけが正しくて、他の人の宗教はみな間違っている、こういう考え方はよくないよ。

わたしは、あの御方自身がすべてのものに成っていないさるのだ、と悟っている。——人間にも、お像にも、象徴シャールクラマの石にも、みんなの中に一つのものを見ている。すべてのものの中に、わたしは一なるものを見ている。ほかには何も見ないよ！(訳註、シャールクラマ——ヴィシヌ神の象徴として祀られる石)

多くの人は、『自分たちの教義は正しいが、他のは間違っている』と思っている。——『自分たちが勝つんだ。ほかは皆、負けるんだ』と。だが、先に進んでいたものが、ちよつとしたことのために行

(訳註1) ヴィジャヤ・ダシャミー——十日間つづくドウルガー祭の十日目のお祭り、女神デヴィーが悪魔アスラに勝利したこと
を祝う日である。ヴィジャヤは勝利、ダシャミーは十日を意味する。それまでの九日間はナヴァ・ラートリー
と言ひ、ナヴァは9、ラートリーは夜を意味し、九日間にわたり女神がアスラと戦う。

く先を阻はまれてしまふ！　そして後から進んでいたものが追い越して先へ行く。ゴロクダム遊びで、点は沢山かせいでもさっぱり上がらない場合があるだろう。(訳註、ゴロクダム遊び——サイコロ遊びの一つ)　負けるも勝つも、すべてあの御方の手のうち。あの御方のなさることは、わたしには何もわからない。見てごらんよ、ココナツツの実が高い木の上になっていて、いつも陽ひを浴びているのに、中の実みは冷たい！　——一方、ヒシは水の中にあるのに、食べると体が温まる。

人間の体を見る。頭が根本なのに、それがてっぺんについている」

〔聖ラーマクリシユナ、四修行期とヨーガの本質——ブラフマ協会とマノー・ヨーガ〕

マニラル「では、私どもが現在なすべきことは？」

聖ラーマクリシユナ「どんな方法でもいいから、あの御方につながることをだ。二つ道があつてね——カカルマ・ヨーガクと、ママノー・ヨーガクだ。

家カにいる人たちのヨーガは、行カルママを通じてする。学生期、家住期、林住期、遊行期と、四つの修行期(訳註)がある。出家は自分でしたいと思う仕事を(訳註)なるだけ捨てて、果報を求めず(訳註)に毎日の勤行をする。それから杖サを持って施しを受け、聖地巡礼(訳註)をしたり、読経、称名を通じてあの御方と一体つなになることができる。それに、どんな仕事をしていても、果報を求める気持ちつなをすっかり捨てて無執着になれたら、それであの御方と一つになることができるんだよ。

もう一つ、マノー・ヨーガという道がある。このかたちのヨーギーは、外見は何一つ普通と違った

特徴しるしはない。心の中でヨーガをしているのだ。ジャダ・バーラタやシユカデーヴァのようにね。まだ沢山いるが、この二人がよく知られている。この人たちは、髪もヒゲも自然のままにしている。

大覚者パラスンサの境地になると、行為は一切飛んでいってしまう。その人は常に実相を想い、見ている。いつも心はヨーガだ(神と合体している)。もし何かするとしたら、それは人々を導くためにするんだよ。

仕事を通じてもヨーガはできるし、心でもヨーガはできるが、正しい信仰を持つようになるとすべてがよくわかってくる。

信仰によって、クムバカ(吸息の後息を止める呼吸法)が自然にできてくる。——心が集中するとヴァイユ気(風、体内の神経、呼吸)の流れが静まってくる。気ヴァイユの流れが静まると、よけい心は集中して、ブツデイ(知覚)

(訳註2) 四つの修行期——『マヌ法典』に定められた人間の四つの住期のことで、一般には四住期(アーシユラマ)と言われ、学生期、家住期、林住期、遊行期である。

一、学生期(ブラフマチャリヤ)——師についてヴェーダ聖典を学習する期間

二、家住期(グリハスタ)——結婚して子供をもうけ、家庭生活を送りながら家長としての務めをする期間

三、林住期(ヴァーナブラスタ)——家督を子供に譲り、森に隠棲して瞑想する期間

四、遊行期(サンニヤーサ)——聖地巡礼など各地を遊行しながら、死を迎えるのを待つ期間

(原典註1) 名利を求め目的ための活動を止める。これを偉大な学者は出家生活よびと称び

仕事の結果を期待しないことを。賢者たちは離欲とよんでいる

ある学者たちは言う——『活動は必ず何らかの悪を含むから全面的に中止すべし』と

またある学者は言う——『供犠と布施と修行だけは止めるな』と——ギーター18・2・3——

が静かに研ぎ澄まされてくる。こうなった人は、自分ではそれと気付いてはいないがね——」

〔以前の話——修行中、宇宙の大実母に祈ったこと——バクテイ信仰のヨーガ〕

「信仰のヨーガですべてが達せられるということだ。わたしは、大実母の前で泣き泣き頼んだよ——
『マー、ヨーギーたちがヨーガをして知ったこと、智者たちが識別によつて知ったこと——それをわたしに教えておくれ。——わたしに、それをはっきり見せておくれ!』そうしたらマーは、わたしに一切合切見せて下さったよ。無我夢中になって、あの御方に泣いて頼めば、何もかも教えて下さる。ヴェーダ、ヴェーダーンタ、ブラーナ、タントラ、こういうお経や聖典に何が書いてあるか、みんな、あの御方はわたしに教えて下さった」

マニラル「ハタ・ヨーガは?」

聖ラーマクリシュナ「ハタ・ヨーギーたちは、肉体を自分だと思っているサードウダ。ネーティ(水での鼻孔の洗浄)やら、ダウティ(紐ヒモを使った内臓の洗浄)やら、そんなことばかりして——ただ肉体の面倒をみることにだけ浮身をやつしている。彼等の目的は寿命をのばすこと——。夜も昼も肉体に仕えている。ありやよくないね」

〔マニ・マリツクのような社会人は心で捨てること——ケーシャブ・センの話〕

「お前たちのするべきことは何だ? ——お前たちはね、心で女と金を捨てることだよ。お前たちの

ように社会生活をしているものは、世間をカラスの糞のように扱うことはできないからね。

ゴースワミーたち(ヴィシユヌ派の説教師)は在家だ。だから、わたしはこう言っている——『あなた方には祭神カクシールを祀るといふ仕事が残っているのだから、世間を捨てることはできないだろう？——あなた方には、この世はマヤーだなどとい切ることとはできない』と。

チャイタニヤデーヴァ様が家住者に対しておっしゃったことは——生き物に慈悲、ヴィシユヌ派信者へ奉仕、そして称名、讃歌。

ケーシヤブ・センはわたしのことを、『この方は今、神と世間と、この両方のことをしろと言っておられる。だが、いつか突如として我々に咬みつくに相違ない』と言っていた。そんなことないさ。——どうして咬みつかないやらならんのかね？」

マニラル「でも、やっぱりお咬みになりますよ」(訳註咬む——大切なことには容赦せず、とても厳しいこと) 聖ラーマクリシュナ「どうしてさ？ ハツハツハツハ、お前はそれ、そういう境遇(家住者)なんだから——お前らが何もかも捨てる必要などあるものか」

女と金カネを捨てないと宗教アイチャーリヤの教師にはなれない——サンニヤーシンの厳おきてしい戒律
——ブラフマ協会であるマニラルへの教え

「その人々を通して、あの御方が人々を導こうとなさる人々、その人々は世間を捨てることが必要だ。そういう霊的教師アイチャーリヤは女と金を捨てるのがどうしても必要だ。そうでないと、人に教えること

が受け入れられない。心の中で捨てただけではだめだ。外形そとでも捨てなくてはいけない。それではじめて人を教導できるのだよ。そうでなけりや、人々はこう思うだろう。『この人は口では女と金を捨てろなぞと言っていないさるが、自分ではこっそり楽しんでいなさる』

ある医者カウイラジが薬をだして病人にこう言った——『もう一度来なさい。食事のとり方について教えるから——』行ったその日、医者カウイラジの部屋には糖蜜入りのかめが沢山置いてあった。病人の家は遠く離れていた。その後、もう一度行くと医者は、『食べものに気をつけなさいよ。糖蜜などは殊ことによくはない』と言った。病人が帰った後で、その場に居合わせた人が聞いた。『どうして、あの人を二度も呼びよせるような面倒なことをなさるのですか？ 一度目に来たとき、言つてあげればよかつたのに！』すると医者は、笑いながら答えた。『それにはわけがあつてね。前の日、あの病人がきたとき、この部屋に糖蜜のかめがいくつも置いてあつた。あの日言つたのでは、病人は私の言葉を心から信用しないよ。心の中で、『お医者さんの部屋にあんなに糖蜜のかめが置いてあつた。きつと、少しづつ舐めていなさるにちがいない。そうとすれば、糖蜜というものがそれほど悪い食べ物であるはずがない』と。今日かめを皆片付けておいたから、きつと信用することだろう。』

アーデイ・ブラフマ協会の教師に会つたことがある。聞けば、二回か三回、結婚したそうだ！ 大きな子供まであるとさ！

こういう人たちが教師なんだよ！ 『神だけが真実在で、ほかのものは皆、錯覚、ウソであります』なんて説教したところで、いったい誰が信じるかね！ ——どんな人間が弟子になるか見当がつくよ。

クソをつけた先生に尻くはこきの弟子！（訳註——先生も先生なら、弟子も弟子というインドの比喩）出家したというのに、もし、心の中でだけ捨てて形の上では女と金にかかわっている——そういう人を通じて人を教導することはできない。人々は言うだろう——『こつそりかくれて糖蜜を舐めているにちがいない』と』

〔聖ラーマクリシュナの金の放棄——医者カワイライジのくれた五タカを返す〕

「シンティのマヘンドラカワイライジ医師者がラームラルのところに五タカくれていった。わたしや知らなかった。

ラームラルがそのことを話したので、わたしは、『誰にくれたんだ？』と聞いた。彼は、『こちらへですよ』と答えた。最初わたしは、それで牛乳の借りがあるからそれで払おう、と考えた。オオ、神さま！ その夜、うとうとしたと思つたらとび起きてしまった。胸を猫にひつかかれたような痛みを感じてね！ さっそくラームラルのところへ行つて、『あの金は、お前の叔母さんサーラター・デーヴィーにくれたのではないのかい？』と聞いてみると、『いえ、あなたにです』と言う。『すぐ返してきてくれ！』とわたしは言い付けたよ。あくる日、ラームラルはその金を返してきた。

出家サンニヤシが金を持つたり、誘惑の対象物安、その他に執着したりするのはどういふことか教えようか？ 長年、菜食だけで暮らして貞操を守りとおしてきたバラモンの未亡人が、賤民ひんみんの情人いとこを持つようなものだよ！（皆あつけにとられた様子）

郷里くくにで、バギ・テリーという油屋の女が大勢の弟子を集めていた。シュードラの女なのに皆が尊敬

するのを見て、地主が面白くなく思い、悪い男に誘惑させた。その男はテリーを墮落させてしまつて——いままでの積善修行を土に返してしまつた。墮落したサンニヤーシンはこんな具合になるんだよ」(訳註、シユードラ——労働者や召使いなど、四つのカーストの中で一番低いカースト)

〔サードゥとの交わりによつて神を敬う気持ちが生じる——ケーシャブ・センとワイジヤイ・クリ〕
〔シユナ・ゴースワミー〕

「お前たちは世間に住んでいるが、お前たちにとってほんとに大切なことは、真理を覚つた人と交際することだ。

先ずサードゥと交わることだ。そうすれば神を敬う気持ちが生まれる。サードゥたちが神の名をたたえたり讃歌をうたつたりしなかつたら、どうして一般の人々が神様を尊び、信じ、信仰する気になるかね？ 三代前からの貴族だと知れば、人はその男を尊敬するだらう？

(校長に向かつて)——智識を持つて悟りを開いても、絶えず耕すことが大切だ。ナンクタがよく言つていたよ——『壺を一日だけ磨いてもどうにもならぬ——くり返し、くり返し、磨きつづけなければ、すぐ錆びついてしまふ！』と。

お前の家に一度行きたいね。お前の家を知っていれば、そこで又、信者たちに会うこともできる。イシヤンのところにいちど行ってみておくれ。

(マニラルに向かつて)——ケーシャブ・センのお母さんが来たよ。あの家の少年たちがハリ称名を

したそうだよ。お母さんは手を拍ちながら少年たちの囿りをまわったそうだ。ケーシャブが死んで、さぞ悲嘆にくれているかと思つたが、さほどでもないように見えた。ここへ来て、エーカーダシー断食を行つて、数珠を練つてマントラを称えていた。信仰が深くてけつこうなことだ」

マニラル「ケーシャブさんのお祖父さん、ラームカマール・センは信仰者でしたからね。いつもトルシーの繁みのなかに坐つて称名しておられました。ケーシャブのお父さんのピヤリモーハンもヴィシヌス派の信者でした」

聖ラーマクリシュナ「父親がそんなふうでなけりや、息子があれほどの信者にはならない。ごらんですよ、ヴィジャイの様子を――。

ヴィジャイのお父さんはバーガヴァタを読んでいるうちに、法悦のあまり、外のことかわからなくなつたものだ。ヴィジャイは時々、ハリ！ハリ！と言いながら夢中で立ち上がる。

最近、ヴィジャイの見る神々の相、あれは皆、まったく正しい！

形ある神と形のない神のことをヴィジャイは話していた――「カメレオンのように、赤くも、青くも、緑にもなるし、それに無色にもなる。ありとあらゆる性質を表すこともあるし、相も性質も全くなくなる時もある」と

〔ヴィジャイは素朴――素朴であれば神がつかめる〕

「ヴィジャイはほんとに素朴だ。――思いきり明けつびろげで、しかも素朴な人でなければ、神に触

れることはできない。

ヴィジヤイは昨日、アダル・センの家に行っていた。まるで自分の家でもあるかのように振舞っていたよ——そして、そこに住んでいる人は、みんな自分の血縁みうちのように感じていた。

世間智を無くさなければ、明けつびろげにはなれない」

こうおっしゃって、タクルルは歌をうたわれる——

心が純粹きれいになったなら

無上の宝は君のもの！

聖ラーマクリシュナ「粘土をよく吟味してからでない、かめは作れない。土の中に砂や石粒が入っていると、かめは割れてしまうからね。だから職人は、先ずはじめに粘土をよく調べるんだよ。

鏡に汚れがついていたら顔は映らない。精神こころが純粹でなければ、本自性スワルーパをさとることはできない。

ほら、そうだろう。いままでだって、神の化身が現れる場所には必ず誠実マヘがある。ナンダゴーシユ(クリシュナの養父)、ダシャラタ(ラーマの父)、ヴァースデーヴァ(クリシュナの父)、ここのう方はみな、素朴で無邪気な人柄だった。

ヴェーダーンタでは、知性が清浄にならなければ、神を知ろうという気持ちは起こらない、と言っている。

最後の誕生か、またはよほどの苦行をしなければ、明けつびろげで大自在で、しかも純真な心にはなれないものだよ」

聖ラーマクリシユナの子供の境地

タクルルは、足が少し腫れたといつて子供のように心配していらつしやる。

シンテイのマヘンドラカワイラジ医師がきてあいさつをした。

聖ラーマクリシユナ「(プリア・ムクジェー等、信者たちに向かつて) 昨日、ナランに言ったんだがね——『お前、足を押しみてくれ、へこみができるかどうか』と。押しみたら、へこみができた。それで、わたしはホツとした。(ムクジェーに向かつて)——お前、ちよつと自分の足を押しみておくれよ、へこむかい？」

ムクジェー「はい、へこみます」

聖ラーマクリシユナ「ああ！ 安心した」

マニラル・マリツク「どういうわけですか？ 河の流れに浸けてごらん下さい。薬(重曹)のようなものを撮る必要はございません」

聖ラーマクリシユナ「いや、いや、お前たちは強い血(体力)をもっている——お前たちは話は別だよ。わたしは子供の境地におかれているのさ。

草むらで、いつか何かに咬まれた。蛇に咬まれたら、もう一度咬ませると毒が流れ出るといふのを

聞いていたので、蛇の穴に手をつっこんで待つていた。すると誰かが来て、『何をしていらっしやる？——同じ場所を二度咬まれなければ毒は消えませんよ。別なところではだめです』

秋の湿気が健康にいいと聞いたので、カルカッタから馬車で帰る途中、首を思い切り伸ばして窓から突きだして、露を含んだ風に当たっていたつけ(一同笑う)。

(シンティのマヘンドラ医師に)——あんたのところの、シンティから来ているあの学者はいい人だね。ヴェーダーンタに精通した学者だ。わたしのことを尊敬している。あの人に、『あんたは大そう学問がある。でも、自分は学者だぞというウヌボレは捨てなさい』と言ったら、大そう喜んだよ。彼といっしょに、ヴェーダーンタについて話したよ』

〔校長への教訓——純粹真我、無知無明、ブラフママーヤー、ヴェーダーンタの考え方〕

〔(校長に向かつて)純粹真我である、それは、すべてに超越して無関係だ。それはのなかにマーヤーまたは無知無明がある。このマーヤーのなかに三グナがある——サットヴァ、ラジャス、タマス。純粹真我である、それのなかにこの三グナがあるんだが、それにもかかわらず、それはすべてを超越して、すべてと無関係だ。火の中に青い色の粒を放りこめば、青い炎がみえる。赤い色の粒を放りこめば、赤い炎がみえる。だが、火それ自体は何の色もない。〕

水の中に青い色を入れると青い水になる。ミョウバンを入れると水は元の色になる。

肉を運んでいた賤民がシャンカラにさわってしまった！ シャンカラが、『私にさわったな！ 無

礼者め！』と叱ると、賤民は言った。『もし、タクルルよ、手前もあなたに触わりませんし、あなたも手前めに触れてはいませんよ！ あなたは純粹真我——あらゆるものに無関係、超越していなさる』

ジャダ・バーラタも、それと同じことをラフীগナ王に言った。

純粹真我（シュッタート）はあらゆるものに超越し不可触だ。そしてまた、純粹真我は目で見ることはできない。水に塩が混ざっていると、塩は目で見ることはできない。

純粹真我こそ大原因だ。原因の原因だ。粗大、精妙、原因、大原因とあつてね、五元素（地・水・火・風・空）は粗大意、知覚、自我意識は精妙。自然または根元造化力は原因。ブラフマン、また純粹真我が大原因だ。（訳註——卷末の「解説 二十四の存在原理」参照のこと）

この純粹清浄の真我こそ、わたしたちの本性なんだよ。

智識（智慧）とは何だろうか？ この、自分の本性を覚つて、そこから心を動かさないことだ！ これが純粹真我を知る、と言うことなんだよ」

（訳註3）ジャダ・バーラタ——全てを放棄した聖者であったが、一つだけ鹿に愛着を持っており、亡くなる時に鹿のことを思つて死んだので、鹿として再生した。鹿としての生涯が終わつた後に、再び人間として再生する。このときには、過去世の経験から何の執着も持たずに、傍からは、問抜け、バカ、と言われていた。ある時、ラフীগナ王の乗った駕籠の担ぎ手が病気になるてしまった時、たまたま傍にしゃがんでいたジャダ・バーラタは駕籠を担ぐことになる。担ぎながら、ジャダ・バーラタは感じるところがあつて、ラフীগナ王に真理の言葉を伝えた。

「カルマはいつまで?」

「カルマはいつまで続くのか? それは肉体我意識がある間だ。つまり、この肉体が自分だと思つて
いる間だ。ギーター(原典註)にこのことが説明してあるよ。

身体をまことの我と思うこと、これを名付けて無智と言うんだよ。

(シヴァプールのブラフマ協会員に向かつて)——あなたさんはブラフマ協会の方ですか?」

その人「はい、さようでございます」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、わたしはね、目と口を見れば、無形の神を探求もとめている人だといふことがすぐわかる。あなたさんは、もう少し深く潜もぐるといいですよ。上の方に浮かんでいたのでは宝玉をとることはできないからね。わたしは、形のある神も、形のない神も、みんな認めています」

〔マルワリの信者とタクル、聖ラーマクリシュナ——ジーヴァートマン——チッタ〕

ブラバザールからきたマルワリの信者たちが入つてきてあいさつをした。タクルはこの人たちをおほめになる。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて)アハー、この人たちは信心深いんだよ。みんな神詣ブラサードでして——讃歌をうたうし——お供物をいただく! 今度、この人たちが説教師に選んだのはパーガヴァタの学者だ」(訳註、パーガヴァター——ヴィシヌ神の化身の物語。特にクリシュナの生涯をくわしく記したヒンドゥー教の聖典)

マルワリの信者「私はあなたの召使いです、という場合、その私は何者でございましたか？」
聖ラーマクリシユナ「精妙体、または個我だ。意識、心(心素)、自我意識、この四つが集まったものが精妙体だ」

マルワリの信者「個我というのは、どういうもので？」

聖ラーマクリシユナ「八つのカセでしぼられた魂のこと。チッタ(記憶の居場所)というのは何だ？
『アッ』と声をあげる、あれだ」(訳註——パツと思ひ出した時、『アッ、あれだ』と言う時の『アッ』)

〔マルワリの信者の質問——死んだらどうなる？ なぜ無明がある？ ギーターの考え方〕

マルワリの信者「お上人さま、死んだらどうなるのでございませうか？」

聖ラーマクリシユナ「ギーターの考え方によると、死ぬ時に心で思っていたものになるそうさ。パーラタ王は鹿のことを考えていたので鹿になった。それだから、神さまをつかむために修行しなけりゃいけないんだよ。夜も昼もあの御方のことを考えていけば、死ぬ時そのことを考えるだろうからね」
マルワリの信者「はい、お上人さま。私どもは何故、世間のいろんなことが捨てられないのでございませうか？」

(原典註2) 肉体をまとった者たちにとって 活動をすべて止めることは不可能だ

しかし 仕事の結果を放棄した人は 真の離欲者である —— ギーター 18・11 ——

聖ラーマクリシュナ「それが無明マイヤというもののなさ。無明マイヤのなかにいると、真実ほんとのことが虚うそに、虚うそのことが真実ほんとに感じられるんだ。真実とはつまり、永遠不滅のもの——至高のブラフマンだ。虚とはつまり、この世のこと——はかなく流転するものことだ」

マルワリの信者「お経を読みましたが、さっぱり実感が湧いてこないのですが、何故なぜでございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「読むだけじゃどうにもならんよ。修行をしなけりや。あの御方を呼ばなけりや。シッデイ、シッデイと口で言っただけじゃだめだろう、いくらか口に入れなけりや効きやあしない。(訳註、シッデイ——シヴァ神に捧げる飲み物で、気分を高揚させる麻薬性、中毒性の成分を含んでいる)

この世はトゲだらけの木のようなものだ。手でさわると血が流れる。もしトゲのある木をもつてきて坐りこんで、この木は燃える燃えると言ったところで火がつくかい？ 智慧の火種を集める。その火をつけるとはじめて、木は燃え尽きるんだよ！

修行の段階では、少しは苦勞しなけりやならないよ。その後で道は楽になる。河の曲がりのところで舵かじをとつたら、あとは順風おひかぜに舟をまかせてやれ」

〔先ず無明マイヤの世間を捨て、そのあとで智慧を得る——神を体得する〕

「無明マイヤの家の中にある限り——無明マイヤの雲がかかっている限り、智慧の太陽の光線ひびはささない。無明マイヤの家から出て外に立てば(つまり、女と金を捨てたならば)、智慧の太陽で無知無明は消え去る。家の中にレ

ンズを置いたら下の紙は燃えない。家の外に出て立てば、太陽の光線がレンズにあたつて下の紙は燃える。

また、雲がかかつていても紙は燃えないね。雲がなくなれば燃える。

女と金の家から少しでも離れて立つて霊的な修行をする。そうしてこそ、はじめて心の闇は消えるんだよ。無知と我執の雲が消えてこそ、まことの智識が得られるんだよ。

くりかえすがね、女と金こそが雲なんだよ」

以前の話し——ラクシユミー・ナラヤンが一万タカくれると言つたので聖ラーマクリシユナが氣絶したこと——出家サンニヤンのきびしい戒律

聖ラーマクリシユナ「(マルワリの信者に)全てを捨てた人の戒律おきては大そうきびしい。女と金にはほんのわずかでもかかわつてはいけないのだ。金に自分の手をふれることもしないし、そばに置いておくこともしない。

マルワリのヴェーダーンタ派信者のラクシユミー・ナラヤンは此処によく来たものだ。この寝台の敷物が色褪せているのを見て、こう言つた——『一万タカをあなたの名義にしておきますから、その利息で費用かかをまかなつて下さい』と。

彼がこの言葉を口にするが早いか、わたしは棒でなぐられたような具合になつて氣絶してしまつた！

氣をとり戻してから、「お前、二度とそんな言葉を口にするな。そうでなけりゃ、二度とここへ来るな。わたしは金に手をふれることはおろか、傍におくことさえもできないんだ」と言い渡した。

彼は頭のいい男でね、何しろヴェーダーンタ哲学を研究しているくらいだからこう言う。——『では、あなたはまだ、捨てるか受けたるかという二元的境涯から脱けてはおられないのですか？ 完全な智識を獲^えておられないとみえる』

わたしは言ったよ——『とても、そんな高いところまで行っていないよ』と（一同笑う）。

すると、ラクシュミー・ナラヤンはフリダイのところに金をおいていこうとした。わたしはまた言ったよ——『そんなことをしたら、わたしはつい、これに使え、あれに使え』と言ってしまったし、もしその通りにフリダイがしなかつたら、腹を立てるにちがいない！ 金がそばにある、というのがもう悪いことなんだ！ そんなことをしたらいけないよ！』と。

鏡のそばに物があれば、映らないわけにはいかないだろう？』

〔聖ラーマクリシュナと解脱の神髄——ヴェエダではなくプラーナが末世^{カキ}に求められる道〕

マルワリの信者「お上人^{マヘーラーシ}さま、ガンジス河の岸辺で死ななければ、解脱できないのでございませうか？」
 聖ラーマクリシュナ「智識が完成すれば、解脱できるんだよ。どこに居たつてかまうものか——死骸やゴミが積み重なった山で死のうが、ガンジスの岸辺で死のうが、正しい智識をもった人は解脱する。」

だが、無智な人にとっては、ガンガアの岸辺がいいんだろ、うねえ」

マルワリの信者「お上人さま、ベナレスで死ねば解脱できるといふのは、どういふわけでございませうか？」

聖ラーマクリシュナ「ベナレスで死ぬとシヴァが会って下さる。そして、『この形をとったわたしの相は、無明のなかでとった姿だ。わたしは、信者たちのためにこの相をとっている。——さあ、見なさい。わたしは完全無欠のサッチダーナダに溶け込んでいく！』こうおっしゃって、その姿は消える！

プラーナでは、賤民でさえ神を信仰すれば解脱できると言っている。この教義では、称名をしさえすれば解脱できると言う。犠牲も、供犠も、密教的修行も、マントラも、一切合切必要ないと言っている。ヴェーダの考え方はこれとは別だ。バラモンでなくては解脱できない。マントラを正しく発音して称えなければ、神は祭祀を受けつけない。犠牲、供犠、秘密の修行、マントラのくり返し——みんな規則通りに行わなければならない」

〔カルマ・ヨーガは大そう困難——末世には信仰のヨーガ〕

「末世の今、ヴェーダに書いてある通りの行事をする時間があるかい？」

だから現代は、ナーラダのような信仰がいいのだ。

カルマ(行い)・ヨーガは大そう難しい。無私の気持ちになれなければ、行いは束縛の原因になる。

それに、食べ物に頼っているだろう——(食べ物を得る為に多くの時間が必要で)すべてのことを(ヴェーダの)規則通りに行う時間がない。昔ながらの木根草皮を十種類もあつめてダシヤムール(煎じ薬)をつくっているうちに、熱病人の方は間に合わなくてオダブツだ。現代の熱サマシを飲まなけりやだめだ。

ナーラダのような信仰——あの御方の名を唱え、讃歌をうたうことだ。

末世にはカルマ・ヨーガは合わない。信仰のヨーガが適している。

世間において、過去世でしのこした経験がある分だけ仕事をしろ。そして、神への信仰、恋慕の気持ちを養うことだ。あの御方の名をとなくて讃歌をうたえば、過去の行為は帳消しになるからね。

仕事を一生の間する必要はないんだよ。あの御方を清浄な気持ちで慕うにつれて、仕事の方は減ってくる。あの御方をつかんでしまえば仕事は捨てられる。嫁が胎に子をはらめば、姑は家事を減らしてくれる。赤ん坊が生まれたら、もう何もしないで子守だけしていればよくなる」

〔ブラフマンは存在の本質——正しい傾向を持って生まれると神への思慕を抱くようになる〕

午後四時ころ、南神村に住む青年が数人入ってきてあいさつをした。席につくと、彼等はさつそく質問をはじめた。

青年「先生、智慧とはどういうものですか？」

聖ラーマクリシュナ「神だけが真実在で、そのほかはすべて虚仮。これを知るのが智慧だ。真実在——またの名をブラフマン。もう一つの名を時」といふ。だから、こう言われているよ。——『兄

「良い傾向を持って生まれた人——ゴヴィンダ・パル、ゴパール・セン、ニランジャン、ヒーラ」
 「ナンダ、昔の話——ゴヴィンダの到着、ゴパールとタゴール家の少年達、一八六三〜六四年」

「ここには大勢若い連中が来るがね、でも、神を熱心に求めている者はほんの僅かだ。彼らは前世からこういう傾向を持って生まれたんだよ。こういう若者は、結婚の話になると、いやがって身ぶるいするよ！ 結婚など考えてもみないんだよ！ ニランジャンなんか子供の頃から、『お嫁さんはもらわない、お嫁さんはもらわない』と言っているよ。(訳註——前世から受け継いだ傾向、力や性格をサムスカラと言ふ)

「ずい分前のことだが(二十年位前)、バラナゴルから二人の青年がよくここへ来ていた。一人はゴヴィンダ・パルという名前、もう一人はゴパール・センと言ったな。彼等はほんの子供のころから、神さまのことを考えていた。結婚の話になると、こわがって悲しそうにしていた。そのうち、ゴパールの方は浅い三昧(パーヴァ・サマーテイ)に入ってたね！ 世俗的な人を見ると、嫌がって隠れるようにしていた。ネズミが猫を見たような按配(あんばい)にね。タクール家(タゴール家)の息子たちがここの庭を散歩に来たとき、客殿(客殿)に閉じこもってしまったよ——その連中と話をしなくてすむようにね。

「ゴパールは五聖樹(パンチャバタイ)の杜の木かげで浅い三昧(パーヴァ)に入っていた。そのままの状態でわたしの足にさわって、『では、私は行きます。もうこの世間に住んでいられません——あなた様は、まだ、まだ、長生きされるでしょう——私は行きます』と言った。わたしも半三昧状態で言ったよ——『また、おいで』と。彼は、『ええ、また来ます』と答えた。

何日か後にゴーヴィンダが会いに来た。わたしが、『ゴパールは?』と聞くと、『ゴパールは逝いてしまいました』と答えた。

ほかのたいいていの若者たちはどういう風かね! 金を儲けて、家だ、車だ、洋服だ、そして嫁とりだ。——このために年中あくせくしている。結婚するとなると、先ず、どんな娘かよく調べる。美しいかどうか、自分の目で確かめに行く!

ある人が、わたしのことをえらく非難するんだ——青少年たちを可愛がつてばかりいる、と言つて。あの少年たちは前生からの続きで——シュッダートマ純粹真我、つまり神に会いたくて恋い焦がれているんだ。金だとか、肉体の歓びのことに心が向かないんだよ。——そういう青年たちだからこそ、わたしは大好きなのさ。

結婚した人たちでも、神を信仰するようになると世間のことに執着しなくなる。ヒーラナンダは結（原典註3）婚している。かまわんさ、彼はさほど執着しないだろう」

マニラル、シヴァプールのブラフマ協会員、マルワリ地区の信者たち、および青年たちはあ（原典註3）いさつをして帰つていった。

（原典註3）ヒーラナンダはシンド州の生まれでB. A.（パチエラー・オブ・アーツ——文学士号）の肩書きを持ち、ブラフマ協会の会員である。カルカッタでタクールに一度お会いして以来、タクールの信者になった。

いつ、仕事を捨てるか？ 聖ラーマクリシュナの信者への約束

日が暮れた。南のベランダと西の円まベランダに灯りがつけられた。タクールの部屋にはランプがつき、香が焚かれている。

タクールはご自分の座にお坐りになって、宇宙の大実母の名をとなえたり、瞑想したりしておられる。部屋には、校長、ブリヤ・ムクジエー氏、彼の友達のハリがいて、床に坐っている。

しばらく瞑想された後、タクールは再び信者たちと会話をなさった。まだ神殿の献灯アーラテには間がある。

〔ヴェーダーンタと聖ラーマクリシュナ——オームと三昧——タット・トワム・アスイ(汝はソレ、なり)——オーム・タット・サツト〕

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて)一日中あの御方を想っている人に、サンディヤー勤行など何で必要なものか！(訳註、サンディヤー——昼と夜との接合時〓朝と夕に行う祈り)

朝、昼、晩にカーリー呼べば

いのり祈禱もつとめ勤行も要りはせぬ

つとめ勤行はあなたいのそばまで行くが

決していっしょ一体になりはせぬ

慈善、誓願、賜りもの

そんなものには目もくれず

この世の愛をひとまとめ

大実母の御足に捧げよう

勤行はガーヤトリーに溶けこみ、ガーヤトリーはオームに溶けこむ。

一度オームをとなえただけで三昧に入るようになったら、もう出来上がりだ。

リシケシにいる或るサードゥは、朝早く起きて、大きな滝のところに行つて立っている。一日中その滝を見つめて、神に向かつて言うんだよ——『ワー、よくやった。ワー、お見事だ。たいしたものだ！』そのほかには称名も苦行も何もしない。夜になると庵に戻つてくるだけ。

神は形がないとか、いや形があるだろうとか、そんなこと考え悩む必要がどこにある？ 人気ひとけのな

い静かな処で、一心不乱になつて泣きながらあの御方に言えはいんだよ——神さま！ あなたのありのままを私に見せて下さい！と。

あの御方は、内にも外にもいなさるんだよ。

内うち(自分の内)にいなさるんだよ——あの御方は。だから、ヴェーダでは、タット・トワム・アスイ(汝はソレなり)と言っている。あの御方は外にもいなさる。現象マヤのせいでさまざまに見える色や形——

だが、実際にはあの御方だけが存在していなさるんだよ。

だから、すべての名前や形のことをとやかく言う前に、オーム・タット・サットと言わなけりやいけないんだ。(訳註、オーム・タット・サット——「オーム、それのみ実在す」という意味のマントラ)

それを見るのと、経典を学ぶのとは全く別のことだ。経典ではヒントを得るだけだ。だから、経典はあまり沢山読む必要はない。静かな処で独りになつて、あの御方に呼びかける方がずっといい。

ギターだつて全部読まなくてもいい。十回ほどギター、ギターといえは、それがギターの核心だ。つまり、ギターギー(捨離)ということ。いざ、人々よ、すべてを捨てて神に祈るべし——これがギターに書いてある一番大事なことなんだよ」

〔聖ラーマクリシュナ、カーリー女神(バヴァタリニー)の献灯アムラティを見て前三昧になられる〕

タクルは、信者たちといつしよに大実母カーリーの献灯アムラティを拝見しているうちに、前三昧状態になられた。だからもう、神像の前で礼拝することがお出来にならない。

信者たちに大事に介抱されながら、自室に戻つていつものところにお坐りになった。まだ、前三昧状態は続いている。そのまま話をなさつた。

ムクジェーの親戚であるハリは、年のころ二十才位らしいが、既に結婚していた。ムクジェーの家同居していて、就職するつもりらしい。タクルを非常に深く信仰していた。

〔聖ラーマクリシユナとマントラ授受——聖ラーマクリシユナの信者への約束〕

聖ラーマクリシユナ「(半三昧状態でハリに向かつて) お前、お母さんに聞いてからマントラを受けろ。(プリヤに向かつて、ハリのことを) これにそう言ったんだが、授けることができななんだ。(わたしは) マントラを授けないよ。(訳註——マントラを授ける＝入門をゆるすこと。弟子にすること)

「お前、いままで通り瞑想と称名をつづけろ」

プリヤ「はい、かしこまりました」

聖ラーマクリシユナ「わたしがこの境地で言ってる言葉を信じろよ。いいか、ここには見せかけなんでものは何もないんだ。

わたしはこういう境地で言うんだ——『大実母¹、ここに心の底から引かれて来る人たちが完成しますように——』」

シンテイのマヘンドラ^{カヴァイアジ}医師はベランダに坐って、ラームラルさん、ハズラーさんと話をしている。タクールはご自分の席からお呼びになった——「マヘンドラ！ マヘンドラ！」

校長は急いで行って、医師を連れてきた。

聖ラーマクリシユナ「(医師に向かつて) お坐りよ。——ちよっとお聞きよ」

医師はいささか不意をつかれた態できまり悪げに腰を下ろし、タクールの甘露の言葉を聞きはじめた。

〔いろいろな方法の仕方——バララーマの気持ち——チャイタニヤの三境地〕

聖ラーマクリシュナ〔信者たちに〕あの御方には、いろいろな方法で奉仕つかえることができるんだよ。

神の愛人になってしまった信者は、いろいろな形であの御方と楽しむ。ある時は、あなたは蓮の花、私は蜂ハチだと思ふ。ある時は、あなたはサッチダーナンド海、私は魚イサナ！と思ふ。

愛人になった信者は、またこんなふうにも思っている。私はあなたの舞姫だ！と。そして、あの御方の前で踊るんだよ。時には、女友だちの気分になったり、侍女の気分になったりもする。それに、あの御方を自分の子供のように思ふこともある。——ほら、ヤシヨーダーのようにね。それから、夫、恋人のように思ふこともある——ゴープイーたちのように。

バララーマ(クリシュナの兄)は、クリシュナのことを親友のように思ったり、時によると、自分はクリシュナの傘か、腰掛けになったように思ったりした。いろいろなやり方であの御方にお仕えたものだ」

タクルは神の愛人となった信仰者の状態を話されながら、それとなくご自身の境地を語っておられるのではないだろうか？ つづけて、チャイタニヤデイツ様の三つの境地を説明なさって、またそれとなくご自分の境地をも暗示なさるのであった。

聖ラーマクリシュナ「チャイタニヤデイツ様には三つの境地があった。深い三昧境——この場合は、全く外界の意識はない。半意識(つまり半三昧状態)のときは、踊ることはできなすつても話はできなかつた。普通意識状態のときは、サンキールタンをうたいなすつた。

(信者たちに)——お前たち、わたしの話を聞いてせいぜい身につけるようにしろよ。俗人はサードゥ

のところに来たときだけ、いつとき世間話や俗念を引つ込めるが、サードウの許もとから出ていくと、すぐ又それを外に出す。鳩が乾し豆をついばむ。胃に入つてこなれたかと思う。ところが、みんな餌袋にいれてあるんだ。餌袋に乾し豆がギシギシ詰まっている」

〔夕方の祈り——聖ラーマクリシュナとイスラム教——称名と瞑想〕

「用事はみんな捨てておいて、夕方にはあの御方に祈らなけりゃいけない。

暗くなると神を思い出す。いままで何でも見えたのに！ たれが、こんなに暗くしたんだろう！
イスラム教徒ムスリムをごらん、きまった時間がくると、何もかも放り出してナマーズ（お祈り）をするよ」

ムクジェー「称名ジヤバをすることは、ためになりますか？」

聖ラーマクリシュナ「うん。称名ジヤバによつて神をつかむことができるんだよ。静かな誰もいない処であの御方の名をとなえつづけていると、あの御方のお恵みがいただける。その後でお目にかかれるよ。

水の中に大きな丸太が沈めてあつて、岸辺に鎖で結ゆわえてある。この鎖の輪を一つ一つ伝つていくと、終しまいには大きな丸太にさわる事ができる。

礼拝より称名ジヤバの方が勝れている。称名ジヤバより瞑想が勝れている。瞑想より神ババウに親愛の情をもつ方が勝れている。バーヴァマハババウより恋慕、それより又、すべてを捧げて神を愛することが最も勝れている。チャイタニヤデヒヤ様はこの愛を成就プレムした方だ。愛が成就すると、神様を縛ゆっている縄をつかんだようなものだ」
ハズラーが入つてきて坐つた。

〔燃えるような神への信愛——聖ラーマクリシユナと称名——ナラン〕

聖ラーマクリシユナ〔ハズラーに〕——あの御方を自分から好きになる、これがラーガ・バクティ（赤熱の信仰）だ。ヴァイデー・バクティ（儀礼的信仰）は表面だけのものだから、何かとうとすぐ動いたり変つたりする。ところが、ラーガ・バクティは大地から湧き出たシヴァの象徴石リンガのようだ。根を探しても探しきれない。自然に生えたシヴァリンガの根は、カーシー（ベナレス）まで届いている。このラーガ・バクティは、神アツタカラの化身とその伴侶たちだけ生じるものだ〕

ハズラー「アハー！」

聖ラーマクリシユナ「お前、いつか数珠をくつて称名していたね。用足しにいつて帰りしなに見たんだが——わたしはつい言ってしまったよ、『大実母よ、何て哀れな奴でしょう。ここへ来てまで数珠をくつて称名するとは！』——ここ（タクールのところ）へ来る人は誰でも、必ず靈に目覚めるんだよ。いまさら、数珠で勘定しながら称名することはないんだ。お前、カルカッタへ行つてみる、何千人もの人が数珠をくりながら称名している——売春婦までもがさ！」

タクールは校長に向かつておっしゃった——「お前、ナランを馬車に乗つけて連れてきておくれよ。この人（ムクジエー）にもナランのことを言つてあるんだが——。来たら何か食べさせてやろう。ああいう青年にもものを食べさせることには、大そう意味があるんだよ」